

例題1 仮名づかい 次のA～Hの文を読んで、問いに答えなさい。

A 今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。
 B ある犬、肉をくはへて川を渡る。
 C ただひとつたつなど、ほのかにうちひかりて行くもをかし。
 D をばなる人のゐなかなよりのぼりたる所に……
 E この獅子の立ちやう、いとめづらし。ふかきゆゑあらん。
 F 笛は、横笛、いみじうをかし。遠うより聞こゆるが、やうやう近うなりゆくもをかし。
 G 公世の二位のせうとに、良覚僧正と聞こえしは、きはめて腹あしき人なり。
 H 「なごかうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを惜しうおぼえさせ給ふか。桜ははかなきものにて、かくほどなくうつろひさぶらふなり。」

『竹取物語』
 『伊曽保物語』
 『枕草子』
 『更科日記』
 『徒然草』
 『枕草子』
 『宇治拾遺物語』

(1) 線1～12を現代仮名づかいに直しなさい。

10	7	4	1
11	8	5	2
12	9	6	3

(2) 線ア～エの中から「が」に置き換えることのできる「の」を選びなさい。

ポイント 主語のとりえ方

① 省略されている「は」「が」をおぎなう。
 ② 「が」に置き換えることのできる「の」をさがす。
 ③ 主語そのものが省略されているときは、前後の文脈から考える。

例題3 会話をとらえる 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

ある驢馬病しける所に、獅子王来てその脈を取る。驢馬これを恐るること限りなし。獅子王親切のあまりに、その身をなでまはして、いづくか痛きぞと問へば、驢馬謹んではく、獅子王の御手の当たりさうらふ所は、今までかゆき所も痛くさうらふと、震ひ震ひぞ申しける。そのごとく、人の思はくをも知らず、親切をすることうたてけれ。

〔注〕獅子王——百獣の王ライオン
 いづく——どのあたり
 うたてけれ——感心しない

『伊曽保物語』

(1) 文中から「獅子王」の言った言葉を書き抜きなさい。

(2) 文中から「驢馬」の言った言葉をさがし、最初と最後の五字を書き抜きなさい。

ポイント 仮名づかいの直し方

▼直し方1

- ① 「はひふへほ」は「わいうえお」に直す。
- ② 「わゐうゑを」は「わいうえお」に直す。
- ③ 「ぢ・づ」は「じ・ず」に直す。
- ④ 「くわ・ぐわ」は「か・が」に直す。
- ⑤ 「む」は「ん」に直す。

▼直し方2

- ① 「ア段音十う」は「オ段音十う」に直す。
例 たう↓とう
- ② 「イ段音十う」は「イ段音十ゆう」に直す。
例 ちう↓ちゆう
- ③ 「エ段音十う」は「イ段音十よう」に直す。
例 てう↓ちよう

例題2

主語をとらえる 次の文を読んで、問いに答えなさい。

醍醐の大僧正実賢、餅をやきてくひけるに、きはめたる眠りの人にて、餅を持ちながら、ふたふたと眠りけるに、まへに江次郎といふ格権者のありけるが、僧止の眠りてうなづくを、われにこの餅食へと気色あるぞと心得て、走りよりて手に持ちたる餅をとりて食ひてけり。僧止おどろきてのち、「ここに持ちたりつる餅は」と尋ねられければ、江次郎、「その餅は、早食へと候ひつれば、食べ候ひぬ」と答へけり。僧止、比興のことなりとて、諸人に語りて笑ひけるとぞ。

(注) きはめたる眠りの人——たちどころに居眠りを始める人

格権者——身辺に仕える侍 気色あるぞ——合図しているのだ

おどろきて——目を覚まして 比興のこと——たわけたことである

(1) ———線1「うなづく」、2「心得て」、3「語りて笑ひける」の主語を、文中から書き抜きなさい。

1

2

3

ポイント 会話部分のとりえ方

- ① 会話部分は「…と」「…とて」の直前まで。「と」「とて」を探すと会話部分の最後がわかる。↓重要!
- ② 会話部分の前後で、「言う」「申す」という言葉がくり返される。
- ③ 「いはく」の次から会話がはじまる。

例題4

係り結びの法則 次のA・Bの文を読んで、問いに答えなさい。

A 秋の野のおしなべたるをかしさは、すすきに あれ。
『枕草子』

B くつわ、鞍の具に、危きことやあると見て、心にかかることあらば、その馬を馳すべからず。
『徒然草』

(1) に当てはまる最も適当な言葉を書きなさい。

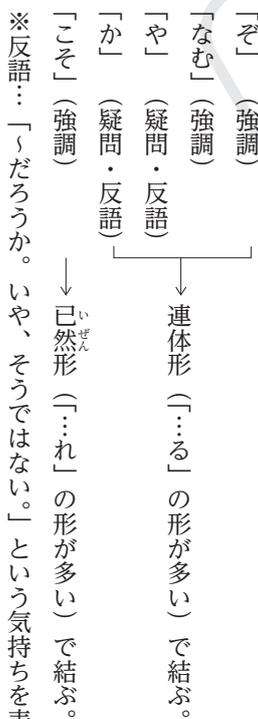
(2) ———線「危きことやある」の意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 危ない所などあるものか
- イ 危ない所やそうでない所がある
- ウ 危ない所がありはしないか
- エ 危ない所があるなあ

ポイント

係り結びの法則

文中に「ぞ・なむ・や・か・こそ」があるときは、文末を終止形で結ばないという決まり。



1 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

ある所にめうがのさしみありけるを、児これをつまみ食ひけるを、そばなる人申すやうは、「これをば昔より今にいたり、物読み覚えむことをたしなむ人は、みな鈍根草と名付け、物忘れするとして、かたく食はぬ物じゃ」といひをしへければ、児聞きて、それならば、おれは、なほ食ふべし。ひだるさを食ふて忘れむといふ。

(注) めうが——食用にする植物の名

さしみ——新鮮な生のものを薄く切った料理 ひだるさ——空腹

『軽口露がはなし』

- (1) **仮名づかい**——線1「めうが」、2「いひをしへければ」を現代仮名づかに直しなさい。

1 2

- (2) **主語**——線2「いひをしへければ」の主語を文中から書き抜きなさい。

- (3) **会話** 文中から「児」の言った言葉をさがし、最初と最後の五字を書き抜きなさい。

- (4) **内容把握**——線3「ひだるさを食ふて忘れむ」の意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア 「めうが」を食べて、空腹のためにつまみ食いしたことを忘れよう。
 イ 「めうが」を食べてはいけなと言われたので、空腹を我慢しよう。
 ウ 「めうが」を他の人に食べさせたいので、空腹を我慢しよう。
 エ 「めうが」を食べることによって、空腹であることを忘れよう。

3 次の文章を読んで、問いに答えなさい。

筑紫にながしの押領使などいふやうなるものありけるが、土大根をよろづにいみじき薬とて、朝ごとに二つづつ焼きて食ひけること、年久しくなりぬ。ある時、館のうちに人もなかりける隙をかりて、敵襲ひ来りて囲み攻めけるに、館のうちに兵二人出で来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひかへしてけり。いと不思議に覚えて、日ごろここにもおし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひ給ふは、いかなる人ぞと問ひければ、「年ごろ頼みて、朝な朝な召しつる土大根らにさぶらふ」といひて失せにけり。深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

(注) 筑紫——今の九州 押領使——治安の維持を仕事とした役人

土大根——大根 おし給ふ——いらっしゃる

『徒然草』

- (1) **仮名づかい**——線1「いふやう」を現代仮名づかに直しなさい。

- (2) **会話** 文中から「押領使」の言った言葉をさがし、最初と最後の五字を書き抜きなさい。

- (3) **語句の意味**——線2「召しつる」の意味として最も適当なものを、ア～エから選びなさい。

- ア めしあがっていた イ お呼びになつてた
 ウ お仕えなさつてた エ さし上げなさつてた

- (4) **主語**——線3「いひて」の主語を、ア～エから選びなさい。

- ア 押領使 イ 敵 ウ 兵二人 エ 皆

